



謹啓

閑心之益法壯業を慶賀す

陳者金田山陰録之刊用式を機

としてありける其進會の極

事山陰乃復多し為法西の

得事其如款意を以てし博

山陰之假依を以てし閑心

を迎ふる事は倫之録之末

用の賜者之五依る小生は

躬氏とて此様持の上の福不

法付由道はた有の送無是終

了後之に上束の定くは何

の及し余も法出然先旨を

法西の由を法使に其の所

致心者法様持の上の事追付



内西の由をお使にたすむる
殺心未だなかりし中上重公追付
けしきも詢お親しく其顔
をたし懸氏歓迎の玉指
指渡す事あり

別冊に編纂あり其府あり石
見史料曰上條井石の府あり
保昔大饑饉に際し石見後
後傳中代ありて撰撰せられた
る廿六のたきつゝおの一命を抛
ちて配らし宛氏を赦ひ又甘
藩を創祀したる事蹟及恩
賜々々末を記し御の

風教に資せんとするもの又
石見史料は我懸内出雲
國なる出雲私史より史
乘ありといへども我石見國
なる強人史編纂く日記
傳記年と共に散逸する代
惜くも莫く其編纂念及せし

惜しむ莫き集梅自念及ん
ものゝろく法西のを機に
小室に進呈及有御
法清院をたまはるる光
榮しむを存有

右の法清院の法清院

如新の法清院

旬如友

五母

有東京

恒有隆

大隈伯爵閣下

侍史